

世界史における旧説と誤解 (2)

厚木商業高校 小林克則

一 はじめに

昨年度に引き続き、社会科学部の研究発表会で、二度にわたって「旧説と誤解」の拾遺集を報告したので、それをまとめてご笑覧に供したい。まるで教科書調査官のようなことをしているが、沖繩戦における住民の集団自決に軍の関与があったことを削除せよ、というような時の権力にすりよったものではない。私たちが常識としてきたことが、研究の進展によって生まれた新たな説に挑戦を受けていることを示し、クリオとともに微笑みたいと願うばかりなのである。もちろん、それは私一人でできるのではなく、歴史分科会の仲間との共同の作業であった。

現在、日本史研究推進委員会に続き、世界史研究推進委員会でも、出版の準備が進められている。『資料集・・・新しい世界史をどう教えるか』(仮称)である。多くの推進委員の先生がたが、古い常識がどのように変えられてきたかについての研究を進められている。日本史に一年遅れて、来年には出版の予定であるが、レヴェルの高い原稿ができつつある。私の報告は、いわば前座にすぎず、片言隻句を取り上げたものに過ぎない。また、前回も述べたように私自身の「懺悔録」でもある。しかし、皆さんの「常識」に少しでも刺激を与え、授業を活性化するのに役立てば、と願っている。私の依拠した文献は、その都度記載しておいたので、参照願いたい。

二 先史時代

(1)「洪積世」について。

最近の用語集などでは、以前に用いられていた「洪積世」に代わって「更新世」、「沖積世」に代わって「完新世」が見出しとなっている。気になっていたので調べてみた。

平凡社の大百科事典の「地質時代」の項によると、今日使われている地質系統は、個人や委員会によって作成されたものではなく、一九世紀以来研究者たちが組み立てた一種の協定なのであって、現在でも修正が行われたりしているのだそうである。佐々木高明『日本の歴史①日本史誕生』(集英社、一九九一)によると、「以前はノアの洪水のような大洪水で堆積物(地層)が形成された時代ということで、この時代は「洪積世」とよばれていた。だが最近では国際的に用いられるプライストシンの訳語の「更新世」が用いられるようになった。(中略)それ以降は、現在の河川の堆積、つまり沖積作用が行われる時代ということで、かつては「沖積世」とよばれていたが、最近ではホロシンの訳語「完新世」が使われるようになった」と述べている。ブリタニカ国際大百科事典(一九七三)によると、洪積世・沖積世を使っていたのはドイツと日本ぐらいだったとのこと。プライストシン(最も現代の、という意味)と名付けたのはイギリスのライエルで、一九世紀前半のことであり、彼がリーセント(現世)と名付けた時代を、一八八五年の国際地質学会議で、ホロシオン(全く現代の、という意味)と呼び換えたとのことである。

(2)「多地域進化説」と「アフリカ起源説」について。

一九八〇年代までは、原人が「アウト・オブ・アフリカ」して、

ユーラシア大陸の各地に移住し、各地で旧人に進化し、旧人から新人に進化した、とする「**多地域進化説**」が有力だった。

しかし、ご存知のように、一九九八年『ニューズウィーク』の特集で、ミトコンドリアの研究により、現代人の全てに共通の母が見つかり、その女性は二〇万年前、アメリカにいた、と結論付けられた。そして、一九九七年にドイツとアメリカの研究グループが、ネアンデルタール人骨からDNAを抽出するのに成功し、「**アフリカ起源説**」が裏付けられた。「すなわち、ネアンデルタールとわれわれ現代人の祖先は、約六〇万年前、アフリカの地ですでに分かれていたことになりました。言い換えればアフリカの原人を共通の祖先として旧人と新人の祖先が別々に誕生し、そのうち両者は別の道を歩み、約二〇万年前に一方の道からネアンデルタールが登場し、もう一方の道からは現代人の祖先が現れることになったというシナリオです」(『ネアンデルタール人の正体』朝日新聞社、二〇〇五)。

最近の教科書でも、「新人の出現についても近年、アフリカ起源説が有力になりつつある」(『山川詳説』、「なお、新人の出現は、アフリカを起源とする説が有力である」(『東京書籍』)などと記述されるようになってきている。

(3) ネアンデルタール人は花とともに埋葬された?

実はそのように教えてきた。「遺体に花をそなえたと思像される人骨が発見され、彼らに埋葬の意識があったことをうかがわせる」(『三省堂世界史B』)と書いた教科書もある。

前掲の『ネアンデルタール人の正体』によると、一九五〇年代にアメリカの人類学者ラルフ・ソレッキは、イラク北部のシャニダー洞窟の4号人骨のまわりの土壌を調べたところ、たくさんの花粉

を発見した。しかし、この花粉はネアンデルタール人が供えた花に由来するものではなく、ネズミが持ち込んだという説もあるという。洞窟で発見された9体のうち、4号人骨のまわりでしか検出できなかったことも辻褄があうらしい。

しかし、洞窟はネズミの穴だらけだったし、ほかの人骨で見つからなかったのは不自然である。引き続き類例を探して検証すべきだが、当面はソレッキの「4号人骨は、花粉が菓草だったから、そのような花に包まれて丁寧に埋葬されたシャーマンだった」という夢を残しておこう」と前掲書で赤澤さんはのべている。夢を残しながらも、実例は一つのみであったということにも留意しておく必要があるようだ。

三 古代西アジア世界

(1) 肥沃な三日月地帯とはどこか。

この言葉は、アメリカのエジプト学者ブレストッド(一八六五～一九三五)が、チグリス・ユーフラテス流域からシリア・パレスチナにいたる三日月形の一帯につけた呼称で、のち、エジプトもこれに含めた。多くの用語集はこれにしたがっている。

しかし、これに対し、ブレイドウッドは、ザグロス、タウルス、レバノン山麓下部地帯と河谷平野、すなわちブレストッドのいう平野部を取り囲む丘陵側面地帯で農耕・牧畜が発祥したという説を立て、こちらこそが真の肥沃な三日月地帯であるとした(『角川世界史辞典』)。ブレイドウッドの説については、『岩波講座世界歴史1』の旧版(一九六九)にも詳しく紹介されている。ブレストッドは灌漑農業の成立に重点をおき、ブレイドウッドは灌漑農業以前の天水農

業の形成地こそが重要であると考えたといえよう。

現在では、ブレイドウッド説による用法が主流のようである。『新編西洋史辞典』（東京創元社、一九九三）や、『岩波講座世界歴史2』（一九九八）の藤井純夫論文（「肥沃な三日月地帯」の外側）は、いずれもブレイドウッド説にもとづいて、この用語を説明・使用している。前掲の『ネアンデルタール人の正体』では、注でブレステッド説を紹介しながら、本文や図ではブレイドウッド説にもとづいた表現がなされている。これからは、図表や教科書で図示するときはいずれの説にもとづいたものであるかを明示する必要があると思われる。

ところで、藤井論文によれば、「初期農耕集落は、ヨルダン溪谷からダマスカス盆地、ユーフラテス中流域にかけての、扇状地・三角州・湖岸・河岸段丘に集中している。このことは、西アジアの初期農耕が、丘陵部の粗放天水農耕からではなく、むしろ低湿地の小規模園耕から始まったことを示唆している（文献、谷泰『神・人・家畜 牧畜文化と聖書世界』平凡社、一九九七）」とのことである。今までは、天水農耕から初期農耕が開始されたとするのが定説であったが、この定説の変更が迫られている。

（2）「シユメール」か「シユメル」か。

現在のほとんどの書物には、もちろん「シユメール」と書いてある。しかし、最近出版された小林登志子『シユメル 人類最古の文明』（中公新書、二〇〇五）の「はじめに」の注によると、アッカド語の原音に近いのは「シユメル」であるとのこと。実は、三笠宮崇仁『大世界史1 ここに歴史始まる』（文芸春秋、一九六七）にも、ちゃんと「シユメル」と表記されていた。

小林さんによると、第二次世界大戦中に「高天原はバビロニアにあった」とか、天皇のことを「すめらみこと」というが、それは「シユメルのみこと」であるといった俗説が横行した。そこで、シユメル学の先達の中原与茂九郎が、混同されないように音引きを入れて「シユメール」と表記した。その話を三笠宮は直接中原氏から聞いたとのことである。なるほど、三笠宮が「シユメル」と表記していたわけである。これからは、シユメルと教科書も再び書き換えていく必要があるであろう。

（3）「ウルのスタンダード」とは何か。

戦争の場面、饗宴の場面などで有名なウルのスタンダードは、シユメルの文化を表す絶好の素材である。しかし、「スタンダード（軍旗）」と表記されると、布で出来ていると誤解されはしないだろうか。この名称は、前二六〇〇年ころのウルの王墓から、一九二七年に発見したイギリスのウーリー（一八八〇〜一九六〇）が名付けて、そのまま用いられてきた。しかし、小林さんの前掲書によると、これはラピスラズリや赤色石灰岩のモザイクをほどこしたパネルであり、楽器の共鳴箱との説ある木製の箱である。生徒には誤って説明しないようにしたいものである。

（4）「中王国時代」と「ヒクソス」の関係について。

以前は、ヒクソスがエジプトの中王国を滅ぼしたと書く本がほとんどだった。最近の世界史教科書でも、中王国時代の末期にヒクソスが侵入し、それが混乱をもたらしたとして、明言はしないまでも、中王国の滅亡との関係を示唆しているものが多い。

しかし、屋形禎亮氏は『世界の歴史1』（中央公論社、一九九八）および『岩波講座世界歴史2』（一九九八）において、中王国が滅

んだ後の、第二中間期にヒクソスがナイル・デルタ地方に侵入して、初の異民族王朝を建設したと明言している。山川の用語集は、二〇〇四年版では、中王国は末期にヒクソスの侵入を受け滅亡したと記述していたが、二〇〇六年版では、中王国は王権が衰えて滅亡した、と屋形説を受け入れた記述に改められている。

四 古代地中海世界

(1) ファランクスについて。

教科書や図表などに、「初期の」ファランクス（重装歩兵の密集隊）のイラストが載っていることがあるが、それが誤っているのがあった。つまり、後ろに一〇人以上ホプリテス（重装歩兵）が並んでおり、持っている長槍も五〜六メートルなのである。しかし、これはマケドニアで用いられたファランクスなのであって、初期のものではない。スパルタで創始されたという重装歩兵の密集隊は、厚さが8人ほど、槍が二〜三メートルほどであり、それが戦場いっばいに線のように横隊を組んでいたのである。ある教科書の新版では、そのように直されていた。

(2) ペルシア戦争とポリスの団結について。

ある図表で「ペルシア軍に対し、アテネ・スパルタを中心とする諸ポリスは一致団結して戦い、危機を克服した」と説明されていたが、これだけでは、「ギリシアのポリスがすべて一致団結して戦った」、もしくは「ヘラス連合に加わった諸ポリスには動揺や裏切りがなかった」かのように受け取られる可能性がある。

その図表にも色分けされているように、ペルシア側についてポリスは多かつたし、中立を決め込んだポリスもあった。ペルシア

と戦った約三〇のポリスのなかにも、テバイ（テーベ）のように途中からペルシア側に寝返ったポリスもある。

昨年出版された桜井万里子氏の『ヘロドトスとトゥキュディデス』（山川出版社）では、テルモピュライの戦いについて次のように述べている。「レオニダスは選りすぐりのスパルタの兵士三〇〇名を率いてこの地峡に陣取った。他のペロポネソス同盟軍も加わった。そこに、間道を通って近づいてきているとの情報もたらされ、さらに臍物占いも死を予告していたため、戦いが絶望的な結果に終わるとの予感を誰もが抱いたのであった。戦線を守るべきか、撤退すべきかの議論が交わされた。結局レオニダスが自らすすんで残ったテスピアイ軍、それにレオニダスによって強制的に残留させられたテバイ軍とがこの地峡に残り、敵軍を迎え撃つことになった」。つまり、テバイは裏切るのではないかとの疑惑がもたれていたのである。実際、テバイ軍は玉砕せずにペルシア軍の捕虜となり、テルモピュライの戦いの後、テバイを中心とするポイオティアの諸ポリスはペルシア側についていた。テバイはペルシア軍司令官のマルドニオスの基地となり、プラタイアイの戦いの後、ギリシア同盟軍に包囲されて降伏している。ヘロドトスは、サラミスの海戦にいたる過程でも、諸ポリスが様々な利害関係から対立をくりかえす様子を描いている。強大なペルシア軍を前にして、自らの存続をはかるために諸ポリスが右顧左眄するのは当然のことであった。

各ポリスの内部において、親ペルシア派と反ペルシア派とに市民が分裂して争ったことも当然であろう。有名なのは、アテナイ（アテネ）の僭主だったヒッピアス（ペイシストラトスの息子）が、追放されたのちペルシアに亡命し、ペルシア軍のマラトン上

陸を手引きしたことである。以上から、ポリス相互の、またポリス内部の相克が明らかになる。ペルシア戦争は、近現代の国民国家どうしの戦争とは異なっていたことに注意したい。

(3) サラムスの海戦の指揮者は誰か。

「テミストクレス率いるギリシア艦隊が」と書いた用語集を見かけたが、ギリシア艦隊の指揮者はどのようになっていたのだろうか。ヘラス連合のポリスの多くは、ペロポネソス同盟のポリスであった。そのため、ギリシア軍の統帥権はスパルタが握っていた。

ヘロドトスは次のように述べている。「アルテミシオンに集結した船の総数は、(中略)二七一隻であった。指揮の最高権を掌握する司令官の地位は、スパルタ軍の出したエウクレイデスの子エウリュビアデスが占めた。これは、同盟諸国が、ラコニア人が指揮をとるのでなくば、自分たちはアテナイ人の指揮には従わず、まさに結成せんとしている遠征軍を解散するであろうと声明したからである」(松平千秋訳『世界古典文学全集』筑摩書房)。

サラムスの海戦のときの最高指揮官もエウリュビアデスであった。「(テミストクレスは)遂にエウリュビアデスを説き伏せ、船をおりて指揮官たちの会議を召集することに同意させた」(前掲書)。テミストクレスは、アテナイ海軍の指揮者ではあったが、ギリシア艦隊全体の指揮者ではなかったのである。

だからこそ、テミストクレスの計略が可能となった。彼は、サラムスの海戦の前日にクセルクセス一世に秘密の使者を送り、ギリシア軍が逃走を図っていることを知らせ、隻数で最大のアテナイ船隊の寝返りを暗示して、狭いサラムス水道にフェニキア軍を主体とするペルシア海軍を誘い込むことに成功したのである。彼

が最大の功労者であったことは疑えない。

(4) 『ジュリアス・シーザー』について。

古い話で恐縮だが、私の高校時代の教科書には、「シーザー」と表記されていた。大学の英語の時間には、シェークスピアの『ジュリアス・シーザー』を学んだが、高校教師になってようやくラテン語では「ユリウス・カエサル」と呼ぶことを知った。しかし、しばらくはジュリアス(ユリウス)とはカエサルの個人名だと思っていた。「旧説と誤解」そのままの話である。

もちろん、彼のフルネームは「ガイウス・ユリウス・カエサル」であり、父と同名であったことでも知られる。ガイウスが個人名、ユリウスはアエネアスの子ユリウスに由来するといわれる。パトリキの氏族名であり、カエサルはユリウス氏族のなかの家系名である(東京創元社『新編西洋史辞典』)。

(5) コロッセウムについて。

これまた、私の恥さらしのひとつであるが、同じような誤解が散見するので書いておきたい。

二〇年以上前、初めての海外旅行でフランス各地をめぐり、ニームで円形闘技場を見て、「あっ、コロッセウムだ」と思わず叫んでしまい、部会の先輩の先生方から「小林さん、コロッセウムというのは、ローマの円形闘技場のことなんだよ」と笑われてしまったものである。

もちろん、円形闘技場は一般にアレーナといい、アレーナの本来的意味は「砂場」で、観客席とは区別された「闘技を行う場所」のことである。ローマのアレーナの名称は「フラウィウス朝の円形闘技場」であって、その傍にあったギリシアの太陽神ヘリオスに模

したネロ帝の巨像（コロッセス・ネロニス）の名称が転用されて、コロッセウムと呼ばれるようになったといわれる（平凡社大百科事典）。

五 東アジア世界

(1) イネの起源地はどこか。

つい最近までは、「雲南、アッサム」がイネ栽培の起源地とされていた。

一九八〇年代からの中国の研究では、野生イネの北限である淮河以南で栽培が始まったとされ、湖南省で前七〇〇〇年以前の栽培イネが発見されているという。そして、一万年以上前から、**長江中流域**で、野生か栽培かは不明ながら、土器とともにイネが存在していたことが確認されている（宮本一夫『中国の歴史1』講談社、二〇〇五）。

なお、土器の起源についてであるが、以前は約一万年から西アジアを起点として各地に伝播したとする「一元説」が有力であり、日本の縄文土器が約一万二千年前から出現したという測定結果にも疑問符がつけられていた。しかし、現在では土器は何箇所かで独自に誕生したとする「多元説」のほうが有力となっており、前掲書でも、土器の最古の製作地は東アジアの大陸と日本であるとしている。

(2) 法頭の出身地について。

教科書や辞典の多くは、法頭を「東晋の僧」と紹介している。この表現では、彼は華中・華南の出身のように思われるのではないだろうか。

しかし、法頭は、現在の山西省にあたる平陽府武陽の人で、華北

の出身であった。三九九年に天竺へ出発したのも長安からであった。当時の華北は、五胡十六国の分裂時代であり、東晋の支配領域ではない。法頭は、四一二年、山東省に帰着し、長安に戻ろうとしたが、動乱のため赴くことができなかった。やむをえず南下して東晋の都の建康に移り、そこで訳経に従事したので、東晋に無関係とはいえない。

誤解を生まないようにするには、『法頭伝・宋雲行記』（長沢和俊訳注、平凡社、東洋文庫、一九七一）の解説や、『アジア歴史事典』（平凡社）にあるように、「東晋時代の僧」としたほうがよいと思われる。

なお、長沢氏によると、『仏国記』は、後世の叢書に収められたときの名称で、仏教関係の書目にあつては、『法頭伝』もしくは『仏（歴）遊天竺記』とよばれていた。東京書籍の新しい教科書では、『仏国記』（『法頭伝』）とされている。そのうちには、これが逆転し、『法頭伝』（『仏国記』）と表記されるようになるかもしれない。

(3) 阿倍仲麻呂の官職について。

ある教科書では、阿倍仲麻呂の唐での官職を「鎮南都護」（安史の乱の後の安南都護）としているが、もう一つの教科書は、安南節度使としている。どちらが正しいのだろうか。

実は、両方正しいのである。『アジア歴史事典』によると、阿倍仲麻呂は、肅宗のときに鎮南都護となり、次の代宗のときに安南節度使に就任した。これを確かめておかないと、どちらかが誤りと考えしてしまう。

(4) 「回教」の呼称について。

「イスラーム（イスラム教）」は、唐代では回教と呼ばれ、それは、

回紇に由来する」と習ったものである。現在の教科書でも、唐代に西方から伝わった宗教の一つとして、「回教」と記したものがあつたが、イスラームは唐代に回教と呼ばれていたのだろうか。

唐代の東ウイグル国で盛んだった信仰は、もちろんイスラームではなくて、マニ教であつた。大阪大学の森安孝夫教授に教示していただいたところによれば、唐代のイスラームの呼称は、「漠然と其教、聖教と自称するのみ」（田坂興道『中国における回教の弘通』東洋文庫）だつたそうである。たしかに、イスラームの意味は「絶対帰依」であるから、宗教の名は何かと問われても漠然と「教え」としか答えることができなかつたであらう。

森安教授によれば、唐代には、三夷教という言い方はあつたが、イスラームを含めた四夷教という言い方はなかつたそうである。そして、宋代になつてムスリムを「回回（ファイファイ）」と呼ぶようになり、モンゴル時代から、イスラームを「回回教」と呼ぶようになったことである。

以上から、唐代には回教という呼称はなかつたこと、それが当時のウイグル人に由来するということもなかつたことがわかる。

(5) 「オゴタイ・ハン国」はなかつたか？

最近の教科書や図表のなかには、オゴタイ・ハン国が記載されていないものが現れた。慌てて、買ってはいたが積んでおいた杉山正明さんの著作に目を通すと、どこにもオゴタイ・ハン国は書かれておらず、山川小辞典にも角川の辞典にもはやその項目は存在していなかつた。

その理由を、森安教授から教示されたので、3月の発表の時には、全文を載せておいた。要約すると、従来は遊牧ウルス（遊牧地と遊

牧民）を持つ王家の王子の集まり、そしてそのまとまりの長（当主）の存在をもつて、「ハン国」と定義していた。しかし、近年のモンゴル時代史研究の進捗により、その定義がより厳密になり、上記の要素のほか、その領域の内にある都市を含めて領域国家になつたものだけを「ハン国」と呼ぶようになった。このような意味で最初のハン国になつたのは「キプチャク・ハン国」であり、「イル・ハン国」がつづいた。しかし、フビライ即位ころまでは、オゴタイ・ウルス、チャガタイ・ウルスは存在したが、都市は大カアンのものであつた。

ハイドゥは、中央アジアに自立して第三のハン国を形成したが、史料上は「ハイドゥの国」であり、また、オゴタイ家、チャガタイ家、さらにフビライ家をのぞくトルイ家の諸王子たちをもまとめたので、それをオゴタイ・ハン国と呼ぶのは適當ではない。その国のナンバー2だつた、チャガタイ家のドアは、ハイドゥの死後、その国をのつとり、「チャガタイ・ウルス」と称したが、これが正式の「チャガタイ・ハン国」の成立である。

以上のような次第で、領域国家をハン国と定義し、ハイドゥ、ドアの覇権の継承を考えると、中央アジアには、ハイドゥの国が一三世紀から一四世紀初頭まで存在し、以後はチャガタイ・ハン国がそれにとつてかわるのであつて、オゴタイ・ハン国という領域国家は存在しなかつたのである。

(6) 新安商人と徽州商人について。

今までは、新安商人で教えてきたが、最近では徽州商人と表記することが多いようである。岸本美緒『世界の歴史一二』（中央公論社、一九九八）にも「大商人の蓄財も、明末の特徴であつた。そのなか

でも有名なのは、徽州（新安）商人と、山西（山右）商人である」とある。その中で引用された史料には「徽州商人」のほうを用いられているのである。

(7) 朝鮮通信使の行列図について。

後景に富士山が見え、店の間を行列している朝鮮通信使の図があるが、あれは本物の行列図なのだろうか。

早川英昭先生の教示によると、吉田光男編『日韓中の交流』（山川出版社、二〇〇四）の中のイリノイ大学教授ロナルド・トビ論文に「通信使の行列を読む」があり、羽川藤永という幻の画家が描いた「朝鮮通信使が江戸の町を通っている姿」は、日本人が演出したパフォーマンスとしての唐人行列であると結論付けている。

その理由は、朝鮮人の装束に本来つけられていないフリル（日本では奈良時代から異人を象徴する記号であった）があること、朝鮮王朝時代の成人男性は必ずひげをたくわえていたが、正使にはひげがないこと、などである。そして、山王祭や神田祭などには、仮装の唐人行列、朝鮮人行列があったことを例示している。

〔閑話休題〕

「金字塔」にはどういう意味があるだろうか。私は、広辞苑を引いて仰天したのであった。ただし大辞林では語釈の順が違うので、あまり衝撃は受けない。

また、「金帳汗国」の由来はなんだろうか。金帳はキプチャクの音写ではない。キプチャクは漢字では「欽察」と表記する。杉山正明『モンゴル帝国の興亡 上』（講談社現代新書、一九九七）を読んでいて、私は自分の誤解に気づいたのであった。

六 東南アジア世界

(1) コンバウン朝について。

このビルマ（ミャンマー）の王朝の名称は、以前は創始者の名前からアラウンパヤー朝としていた。しかし、最近では、首都にちなんだ名称にしている。最初の首都モウソボー（現在のシュエボー）の別名がコンバウンというのである。なお、コンバウン朝の首都はそのちアヴァ、アマプラ、マンダレーとかわったが、ヤンゴン（ラングーン）が首都になったことはない。

(2) ラタナコーシン朝について。

タイの場合も同様である。創始者の名にちなむチャクリ朝ではなく、ラタナコーシン朝と呼ばれるようになってきている。バンコクはヨーロッパ人がその土地の旧称をそのままに記録したことに始まる。タイ語では、「クルンテープ・マハーナコーン・ボーウオンラタナコーシン」で始まる百字を越す長い名をつけているが、略してクルンテープ（天使の町）と呼んでいる。その一部が、現在の王朝名として用いられているのである。

七 イスラーム世界

(1) ジハードの意味について。

「ジハード」とは、異教徒に対する聖戦の意味で使われることが多いが、本来の意味はどういうものであったろうか。

最近出版された小杉泰『興亡の世界史06 イスラーム帝国のジハード』（講談社、二〇〇六）は、その常識に対する応答である。すこし引用しておく。「ジハードはより一般的な奮闘努力のことで、それだけでは戦いを意味しない」。「ジハードとは、向こう見ずに命を投

げ出すことではなく、共同体を防衛するための奉仕であり、その結果としての戦死によって残された家族を救うことも、社会の重要なやくわりであった」。

(2) イスラームの五行について。

五行は全て個人的な義務であると思われるがちである。しかし、巡礼は、各個人にはなく、総体としてのムスリムに課せられた義務なのである。クルアーンにも、全てのムスリムが必ず巡礼せよとは命じておらず、「そこに旅する余裕あるかぎり」行えばよいのである。ヒジュラ暦一二月に集団で行われるハッジュ(大巡礼)と、任意のとき個人で行いうるカーバ神殿への参詣(ウムラ)とは区別されている。なお、ジハードも総体としてのムスリムに課せられた義務である。

(3) カピチュレーションについて。

以前は、「最初のカピチュレーションは、一五三五年スレイマン一世によってフランスに与えられた」といわれてきた。しかし、最近フランスへの授与は一五六九年セリム二世の時代とされてきている(岩波のイスラム辞典、平凡社の新イスラム辞典など)。新しい辞典でひき直す必要のある事項は多い。

八 ヨーロッパ中世界

(1) 皇帝教皇主義について。

最新の教科書でも、皇帝教皇主義がゴシックで表記されている。私も、以前は、西欧中世界は焦点が二つある楕円形の世界だが、ビザンツ帝国は焦点が一つの円形世界であり、それを皇帝教皇主義と呼ぶ、と教えてきた。森安達也『キリスト教史』(山川出版社、

一九七八)では、皇帝教皇主義は学説としては多少の無理があり、異論も出ているとし、ビザンツの教会が教皇権に匹敵するほどの独立性と政治性を有したわけではないし、皇帝が主教の人事を動かすことは建前上は不可能であったとして、言葉の厳密な意味での皇帝教皇主義は存在しなかったとする。しかし、他にわかりやすい用語が無い以上、留保をつけて用いても誤りとはいえないとしている。これに対し、渡辺金一氏は、皇帝教皇主義の概念は、ローマ教皇が叙任権闘争で皇帝に優越する権威を主張した(教皇皇帝主義)ことの反転像であるとし、このような概念ではビザンツ帝国の実情を正しく捉えることが出来ないと主張した(平凡社大百科事典)。これを受けて、最近の辞典も、皇帝教皇主義の項はたててあるものの、否定的評価になっている。

実際、井上浩一『ビザンツ帝国』(岩波書店、一九八二)、をはじめ、最近の中央公論社のシリーズや、岩波講座でも、私の読み落としがあるかもしれないが、皇帝教皇主義という語句は一切用いられていない。以前東大の入試に出題されたために、受験用教科書でしごとく生き残っているだけのようである。

(2) アナーニ事件とボニアティウス八世の死について。

教皇ボニアティウス八世が、フランス王の部下にアナーニで捕らえられ、まもなく死んだことは多くの教科書にのっているが、いつ、どこで死んだかは明確でない。そのため、「アナーニで憤死した」との誤った表現さえみられる。

彼はアナーニの住民に救出され、二週間ほどあとにローマに帰還したが、帰還して二週間ほどでヴァティカンで死んだのである。アナーニ事件で受けた衝撃のためとも、持病の腎臓結石のためともい

われる（今野国雄『キリスト教史Ⅰ』（山川出版社、一九九七）。

(2) ジャンヌ・ダルクは「魔女」として処刑された？

そのように記述した教科書がまだあるが、最近の辞典や用語集では、異端宣告を受けて火刑に処せられたとしている。

古典的名著といえる森島恒雄『魔女狩り』（岩波新書、一九七〇）には、この時期にはまだ新しい魔女概念は完成されておらず、ジャンヌは妖術者、迷信者、悪魔の祈禱師などの異端者とされた、とある。魔女概念を完成したとされる、ドイツのドミニコ会士シユプレングルとクラメールによる『魔女の槌』が刊行されたのは、一四八五年である。

最近の高山一彦『ジャンヌ・ダルク』（岩波新書、二〇〇五）では、ジャンヌが魔女として裁かれ断罪されたのではない、と繰り返している。高山氏は、ジャンヌについての誤りがいまだに流布していることが腹に据えかねたのであろう。

本書には、ジャンヌの最終判決の要旨ものについて、その最後は「被告は分派的であり、教会の統一と権威に背き、背教者である」と結ばれている。

九 欧米近世世界

(1) ドイツ農民戦争を始めたのは誰か。

トマス・ミュンツァーの指導のもとに開始されたとの誤解があるようだ。例えば、「一五二四年、ミュンツァーが、大胆な社会改革なしに宗教上の改革は実現不可能だとし、キリスト教的共産主義の樹立をめざして立ち上がる。共鳴した貧農たちが大規模な一揆を行い、牧師を自由に選択する権利、教会税の軽減、農奴制の廃止を要求」

（長谷川輝夫『世界の歴史17、ヨーロッパ近世の開花』中央公論社、一九九七）といった記述は、そのような誤解を招くといえるだろう。

しかし、ドイツ農民戦争は、一五二四年、ドイツ南西部のシュヴァルツヴァルトの農民蜂起から開始され、傭兵出身のハンス・ミュラーを指導者を選んだ。ミュンツァーが指導して蜂起が始まったわけではない。翌年三月、シュヴァーベンの農民団が蜂起し、有名な「一二箇条」の要求が皮なめし職人ロツァーによって起草され、印刷されて広まった。ルターは『シュヴァーベンの農民の一二箇条に対する平和の勧告』を著して、農奴制廃止には反対するものの、領主にも生活態度を改めるように求めている。

ミュンツァーはこのときドイツ中部のチューリンゲンの帝国都市ミュールハウゼンにいたが、ここに農民戦争が波及してきたとき、それを聖戦と解釈して積極的に参加し、諸侯軍に敗れて五月に斬首されている。ルターは「聖書のみ」を唱えて現世の秩序を容認したが、ミュンツァーは宗教的革新思想を現実の社会変革をめざす政治理論に発展させ、農民戦争のイデオログとなったのは事実である（半田元夫『キリスト教史Ⅱ』山川、一九七七）。

(2) ポトシ銀山の労働力について。

エンコミエンダ制により先住民を使用した、とか、アフリカから輸入した黒人奴隷を使用したという記述がある。

網野徹哉『世界の歴史18、ラテンアメリカ文明の興亡』（中央公論社、一九九七）によると、一八四五年に発見されたポトシ銀山では、初期にはスペイン人鉱山主から先住民がリースを受けて、インカ伝来のやり方で鉱石を精錬しており、銀の多くはインディオ社会

に流れていたという。

一五六九年、第5代ペルー副王に就任したフランシスコ・デ・トレドは、インカ古来の「ミタ制」（輪番で労働力を提供する制度）を導入して、ポトシ周辺の先住民を動員し、さらに水銀アマルガム法を導入して銀生産を急増させたのである。ミタ制は早稲田の入試で出題されたことがある。

(3) オランダの「独立戦争」と「独立宣言」について。

目にした限りでは、新しい教科書でも、一五六八年に「オランダ独立戦争」がはじまり、一五八一年にネーデルラント連邦共和国として独立を宣言した、と記述されている。

しかし、森田安一編『世界各国史14、スイス・ベネルクス史』（山川出版社、一九九八）によると、当のオランダ人たちは、「反乱」「八〇年戦争」と呼び、独立戦争とはあまり言わないのだそうである。オランイエ公ウイレムが起こした「反乱」は、フェリペ二世の派遣したアルバ公によって侵害された多くの特権を回復するためであり、オランダの独立を求めたわけでも、カルヴァン派の宗教的大義のためでもなかったのである。そして、一五八一年七月に反乱州で構成する連邦議会が出した布告は、「低地諸州にたいするフェリペ二世の統治権を否認する布告」であり、決して独立を宣言したものである。すでに彼らはフランス王安リ三世の弟を君主とすることを決めており、ハプスブルク家からヴァロワ家への乗り換えにすぎなかったのである。外国から君主を迎えることには結局失敗するが、一六〇九年、オランダとスペインは一二年間の休戦条約を結ぶが、これが事実上のオランダ独立であった。

なお、「ピューリタン革命」として日本の教科書に出てくる事件を、

「革命」と呼ぶイギリス人は一部の歴史家だけだそうである。内実は国王に対する同時多発的な複合反乱であり、国王に脅かされている権利を回復するという伝統回帰の思想に基づいているからである（大久保桂子『世界の歴史17』中央公論社、一九九七）。

(4) オランダとイギリスの産業の比較について。

オランダは中継貿易に依存していたが、イギリスは毛織物産業を国民産業としていた、そのため結局イギリスがオランダより優位に立った、と私も教えてきたものだ。しかし、前掲の『世界各国史14』の佐藤弘幸氏の文章を読めば、いかにイギリス中心の見方で教科書が書かれてきたかがよくわかる。

一七世紀はオランダの世紀といわれるように、オランダは中継貿易だけでなく、毛織物生産、造船業、海運業、漁業が当時の世界のトップクラスを占めていたのであり、近代世界システムの「中核」にふさわしい工業国家だったのである。

また、イギリス人のいう「名誉革命」は、実はオランダ軍によるイングランド制圧であった。このときのオランダ軍の規模は、百年前のスペインのアルマダをはるかにしのいでいたのである。

しかし、名誉革命によるイギリスとの同君連合が、オランダの没落の端緒となるのだそうである。詳しくは同書を参照されたい。

十 近現代のあれこれ

(1) ワシントン大統領の「告別演説」について。

昨年一月九日の「天声人語」に、ワシントンが議会で決別の演説をした、と書いていた。これも「告別演説」と訳されたことからくる有名な誤解である。

「ワシントン自身は、大統領職を去る前に告別の辞を発表し（**実際に演説したのではない**）、党派の害と、特定の外国との密接な同盟関係を結ぶのは賢明ではないことを説いた」（本間長世『アメリカ大統領のリーダーシップ』筑摩書房、一九九二）。本間さんも、あまりの誤解の多さに、わざわざカッコをつけて、注意を促している。

（2）ドイツ皇帝の即位について。

一八七一年一月十八日、ヴェルサイユ宮殿の鏡の間で行われた儀式は、何だったのだろうか。

色々調べてみたが、定訳はなかった。古くは戴冠式としたものがあり、今でもそう書いた教科書がある。しかし、バイエルン国王のルードヴィヒ二世がヴィルヘルム一世に皇帝の冠をささげてはいるが、それがメインの儀式ではなかった。教科書に出てくる絵は、ヴィルヘルム万歳と叫んでいる場面のものである。

詳細は省くが、「ドイツ帝国建設の儀式」、「帝国創建宣言式」、「帝国創設式典」、「帝国成立祝典」、「即位式」、「ドイツ帝国成立の儀式」など、一つとして同じ表現の本が無かったというのもおもしろい。

群馬県立桐生高校の安達淳先生のご教示によれば、どうやらドイツ語では「カイゼル・プロクラマツイオン」というらしい。世良晃志郎訳では、「**皇帝宣言**」となっていたそうである。

少なくとも、「戴冠式」とは訳せないようである。

（3）ナチス・ドイツのポーランド回廊への要求について。

「一九三九年三月以降、ドイツはダンツイヒとポーランド回廊の割譲を強硬に要求した」という表現があった。これでは、ドイツが両者の割譲を求めたことになる。

東プロイセンとドイツ本土との中間地帯にある「ポーランド回廊」

は、ポモージェ（ポンメルン）の一地域で、古来ポーランド領であったが、ポーランド分割の結果プロイセン領となった。一九三一年の統計でも、ポーランド人が八九%を占めていた。ヴェルサイユ条約でポーランドに復帰したこの地を、ドイツ都市のダンツイヒと同列に置くことは、いくらナチスでもできなかった。

ドイツがポーランド回廊に要求したのは、「ドイツに属しかつ治外法権を持つ自動車道路および複線鉄道をこの回廊を通過して敷設すること」であった。ポーランドにしてみれば、それでも法外な要求であったとはいえよう。